

2018年5月19日

立教大学国際学術研究交流制度  
2018年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	菅谷 憲興
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Associate Professor, Department of Modern Literature, University of Paris-East Marne-la-Vallée 所属機関所在国：フランス
	氏名	Juliette Azoulai
招へい期間		2018年5月3日～2018年5月13日（11日間）
研究経費		342,400円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

\*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2018/05/03（木）	来日
05/07（月）	13:15～14:45 セミナー「フローベール作品における幻想的エロス — 愛の亡霊」、池袋キャンパス7号館7301教室、参加者15名 ※さらにセミナーの後、菅谷研究室（ロイドホール6階）にて、大学院生への研究指導
05/11（金）	15:00～16:30 翌日のシンポジウム、および今後の共同研究の可能性について打ち合わせ
05/12（土）	14:00～17:30 公開シンポジウム「フローベール、スピノザ、ベルクソン — 十九世紀フランス文学と哲学」、池袋キャンパス11号館A301教室、参加者約60名
05/13（日）	帰国

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

今回の招へい期間中の主要な活動は、5月7日に行ったセミナーと、5月12日に行った公開シンポジウムの二つである。

5/7のセミナーは、おもに大学院生を対象に、文学テキストの分析の仕方を実例をまじえて紹介していただいた。内容も十九世紀の小説、特にフローベールの作品を恋愛と幻想のテーマから読み解くというもので、大学院生にも比較的とっつきやすいテーマではなかったかと思う。当日は、私の大学院の授業を受講している学生に加えて、立教大学の博士課程後期の学生やPDの学生、さらに中京大学の山崎教授にも参加していただき、約15名ほどが出席した。参加した大学院生のなかにはこの秋からのフランス留学を控えている者もあり、それらの学生が拙いフランス語ながらも、積極的に質疑応答に加わっていたのが印象的であった。また特に博士前期課程1年次の学生のために、私自身が簡単な同時通訳を務め、アズレ先生の発表の要点を紹介しながら進めたが、それが功を奏したのか、1年次の学生も日本語ではあるが、いくつか興味深い質問をしていたのを嬉しく思う。

5/12の公開シンポジウムは、おもに研究者を対象にした学術的なものであり、アズレ先生に加えて、中京大学の山崎敦先生と九州産業大学の藤田尚志先生にもご登壇いただいた。テーマは十九世紀フランスにおける文学と哲学の関係をめぐるもので、私自身が司会と一部通訳を務め、さらに本学兼任講師の黒木秀房先生にもアズレ先生の発表の同時通訳を務めていただいた。発表は三本ともフランス語で行われたが、当日は立教や他大学の学部学生、大学院生、PDの学生に加えて、関東圏のみならず、北海道から九州までまさに全国からフランス文学や哲学を専門とする研究者が集まり、総勢60名前後の参加者を得ることができた。テーマがいささか抽象的だったにもかかわらず、これだけ多くの聴衆に興味を持っていただくことができたのは、おそらく「文学と哲学」という問題設定が近年再び注目されているアクチュアルなテーマであることと無関係ではないと思われる。会場の雰囲気もきわめて良好で、質疑応答も活発であり、むしろ時間が足りないのが惜しまれるほどであった。発表の内容も三本ともレベルの高いものであり、これらは立教大学フランス文学専攻の紀要などを使って近日中に出版したいと考えている。シンポジウム後のちょっとした懇親会にも30名ほどが参加し、講演者三名と積極的に歓談していたが、全体として会場の熱気は予想以上のものであり、主催者としては欣喜にたえない。これは現在のような混迷する時代に、文学や哲学といった人文学の知がいかに必要とされているかの証ではないかと思われる。なお、当日のプログラムは以下の通り。

ジュリエット・アズレ「フローベールとスピノザ的眩暈」

山崎敦「『ブヴァールとペキュシェ』、懐疑主義小説」

藤田尚志「ピエール・マシュレのために——『文学生産の哲学』の可能性」

（特記事項）本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

5/7のセミナー終了後、ロイドホール6階の菅谷研究室に移って、アズレ先生と大学院学生との交流の場を設けた。アズレ先生は本学の協定校でもあるパリ東大学の准教授であり、今後フランス留学を希望する学生の受け皿となってくれるものと期待される。